

検証結果概要（地域コミュニティ施設・ゆうゆう館の再編）

【地域コミュニティ施設】

【検証項目1】コミュニティふらっとの設置目的について

（「全ての世代の利用について」の検証結果）

- ・利用者アンケートでは「どの世代でも利用しやすい」との回答が81.1%であり、全ての世代が利用しやすい施設と認識されている。
- ・イベントや講座等も含めた利用者の満足度は、子どもから高齢者まで、どの世代も概ね8割以上と高かったことから、全ての世代の利用は進んでおり、今後も進んでいくといえる。
- ・日常的な利用、イベント、講座等の利用の場面により年齢に偏りがあり、また、特定の世代には使いづらいとの意見もあったため、今後は、各場面でより幅広い世代が利用できるよう、ラウンジを利用者の「居場所」としてさらに活用していくことも含め、運営方法や事業内容などを検討していく必要がある。

（「施設の特徴などを踏まえた運営上の創意工夫について」の検証結果）

- ・中・高校生などを含め地域のボランティアと協力しながらイベントなどを実施したり、活動団体間の交流につながるような場を設けたり、地域の高齢者が子どもに遊びを教えたりするなど、「身近な地域におけるコミュニティの形成に資する」というコミュニティふらっとの設置目的につながる取組が、各運営事業者の創意工夫により行われていた。
- ・今後も更に幅広い世代の方に利用される施設となるよう、区民の意見を聴く仕組みづくりの検討など、引き続き運営事業者と協力していく。

（「多世代の交流について」の検証結果）

- ・多世代交流という考え方は一定程度評価されており、実際に交流が生まれている事例や交流に対する肯定的な意見も確認できたため、「地域共生社会」の実現に向け、引き続き取組を進めていくことが適切である。
- ・一方、利用者アンケートでは「世代を超えて交流・つながりが生まれる」との回答が51.7%であり、「どの世代でも利用しやすい」、「気軽に利用できる」との回答（いずれも8割程度）と比較すると相対的に低く、また、交流が生まれていても一過性のものになっているなどの意見もあることから、こうした点の解消を含め、更なる工夫が必要である。
- ・多世代の利用については、一定程度定着し、認知もされてきたため、今後は利用から交流に発展させていけるよう、運営事業者とも協力しながら、運営を検討していく必要がある。

（「コミュニティふらっとの設置目的の理解等について」の検証結果）

- ・各アンケートにおいて、コミュニティふらっとの利用を通じてコミュニティが形成されるとの回答の割合が約7～8割と高く、また、「身近な場所に利用できる施設が存在していること」がその施設の利用につながることも判明したことから、コミュニティふらっとには一定の意義があるといえる。
- ・一方、コミュニティふらっとのコンセプトに対して否定的な意見も聴かれたように、施設のあり方については様々な考えがあるため、コミュニティふらっとの意義などについて丁寧に説明していく必要がある。
- ・地域住民などが気軽に立ち寄り、人とコミュニケーションを取れるなど、「居場所」として活用できる施設が求められている。

【検証項目2】施設の有効活用について

（「施設の有効活用について」の検証結果）

- ・コミュニティふらっと阿佐谷の再編整備において、ゆうゆう阿佐谷館時代と比較し、一般利用数は16.9%増加したことから、施設が幅広い世代に有効活用されたといえる。一方、施設全体の利用数が6.5%減少しており、コロナ禍の影響も加味する必要があるが、この点では施設の有効活用が図られていないともいえる。
- ・今後は、コミュニティふらっとも含めた集会施設全体で行う予定としている利用促進策の検討の状況も踏まえつつ、運営事業者とも対応を考えていく必要がある。

【検証項目3】地域コミュニティ施設の再編について

（「地域コミュニティ施設の再編に対する理解について」の検証結果）

- ・区民集会所等の再編の取組について、賛成との回答が40.5%と、反対との回答（22.5%）の約2倍であったことから、理解を得られている部分はあるといえる。
- ・一方、区民集会所や区民会館等の再編について、70%の人がよく知らなかったと回答しており、再編の取組に対しては認知度が低く、コミュニティふらっとへの再編についても、必ずしも十分な理解が得られているとはいえない。
- ・再編整備に対する見解は、施設によりその傾向が大きく異なることも判明したことから、今後、施設再編の背景や必要性、当該施設における課題などを含め、必要な情報を提供したうえで、地域との対話を通して対応を検討していくことが必要である。

（「これまでの進め方について」の検証結果）

- ・これまで区が行ってきた利用者等の意見を伺う取組について、周知が不足していた、住民の意見を十分聴けていなかったなど、課題があった。
- ・今後は情報提供や意見聴取の時期、方法などについて検討するとともに、利用者や地域と対話をしながら共に対応を考えていくなど、進め方を見直す必要がある。

検証結果概要（地域コミュニティ施設・ゆうゆう館の再編）

【ゆうゆう館の再編】

【検証項目1】ゆうゆう館の再編整備の必要性

（「利用者から見たゆうゆう館はどのようなものか」の検証結果）

- ・ゆうゆう館では、高齢者に寄り添った対応を行っていることなどから、利用者からの運営事業者への評価は全体的に高く、この点はコミュニティふらっとでも同様の対応が望まれている。
- ・これまで進めてきた施設再編整備計画の目的や、ゆうゆう館のコミュニティふらっとへ機能継承する取組については一定の理解が得られているものの、このような取組を知らない人も多く、周知や説明を行うことの重要性を認識した。
- ・高齢者が利用する施設は、多世代型施設が良いという意見がある一方、ゆうゆう館への愛着や高齢者だけで気軽に利用できるなどの理由から、多世代型施設よりも高齢者専用（優先）施設を望む意見も多くあり、再編の取組を進めるにあたっては、様々な利用者の意見があることを踏まえ対応していく必要がある。

（「利用者以外から見たゆうゆう館はどのようなものか」の検証結果）

- ・高齢者の多くは健康状態が良く、60歳代は多くの人々が就労しているほか、70～80代になっても、スポーツ・運動や趣味の活動、学習・教養活動やボランティアなど、様々な活動を行っている。
- ・ゆうゆう館で活動している高齢者は全体の16.5%であり、区民集会所・区民会館や体育館、図書館などの区立施設や、カフェやスポーツジムなどの民間施設を利用するなど、活動内容に応じて活動場所も多様化している。
- ・一方で、趣味等の活動を行っていない高齢者の割合も高く、今後の高齢化の進展に伴い、単身高齢者が増加が見込まれる中、家庭でも職場でもない居場所（サードプレイス）の確保は重要な課題である。

【検証項目2】ゆうゆう館の機能がコミュニティふらっとに機能継承されているか

（「ゆうゆう館で行っていた活動が引き続き行えているか」の検証結果）

- ・ゆうゆう館の4つの機能・役割（「憩いの場」「生きがい学びの場」「ふれあい交流の場」「健康づくりの場」）について、6～7割の利用者がこれらの機能・役割がコミュニティふらっとへ継承されていると回答したことから、一定程度機能継承ができていているといえる。
- ・ゆうゆう館で活動していた高齢者団体のうち、約90%がコミュニティふらっとに移行し、引き続き活動している一方で、場所が変わったケースでは、距離が遠くなったことで活動をやめた団体もあった。
- ・コミュニティふらっとへ移行するにあたり、「同じ頻度で活動できるか」「同じ内容で活動できるか」などの不安を抱えている利用者が多かった、移行後もこれまでと同じ頻度・内容で活動できているとの回答も多く、概ねゆうゆう館と同様に活動できていることが確認できた。
- ・ゆうゆう館にはあった温かな雰囲気や居心地が良くないなどの声があり、高齢者の居場所として機能するような施設となるよう対応を考えていく必要がある。

【まとめ（地域コミュニティ施設・ゆうゆう館の再編）】

- この間のゆうゆう館のコミュニティふらっとへの機能継承の取組について、区民から一定の理解が得られていることや、ほとんどの高齢者団体が機能継承先のコミュニティふらっとで活動していることなどから、概ね機能は継承されていると考える。運営面については、多世代交流についての更なる工夫の必要性などの課題や改善点が明らかになった。
- 核家族化や単身世帯の増加、地域コミュニティの希薄化などを背景とした社会的孤立を防止し、年齢や分野を超えて人と人がつながることで住みやすい地域をつくるため、「地域共生社会」を実現することは重要である。その実現に向けては、多世代がつながりを作り活動する場を確保することが必要であり、さらには、高齢者を含む地域住民が活躍できる場、地域における諸課題の解決の場としていくなど、地域の核となる施設としていく必要がある。
- 更なる高齢化の進展により、特に単身高齢者世帯の増加が見込まれており、家庭や職場とは異なる居場所（サードプレイス）を確保することは、高齢者の孤立防止等の観点からも重要であり、ゆうゆう館やコミュニティふらっとはその役割を担う施設の一つとして機能することが必要である。
- これまで機能継承の取組を進めるにあたり、施設利用者への周知や意見を聴く取組が不十分であったことや、コミュニティふらっとについての理解も十分に得られていないまま進めてきたことによる不安や不満の声が寄せられてきたことから、これまで以上に利用者の視点に立った施設づくりが必要である。
- 今後のゆうゆう館をはじめとする施設の更新等にあたっては、利用者や地域住民と地域や対象施設の課題を共有し、対話を重ねながら一緒に計画づくりを進めていく必要がある。住民自治の視点に立って計画づくりに取り組み、すべての人が認め合い、支え・支えられながら暮らすまちを、地域と共につくっていく必要がある。

（「協働事業が高齢者にとってどのようなものか」検証結果）

- ・協働事業は、事業者の創意工夫のもと、高齢者の「いきがい学び」「ふれあい交流」「健康づくり」の目的に沿った事業を行っており、参加者アンケートの結果から、各館平均97.2%の人が満足と回答していることから、利用者のニーズに合った事業を展開していることが分かる。
- ・協働事業の内容や講師の決定にあたっては、町会・自治会や学校、ケア24などの地域のネットワークを活用しており、地域コミュニティの形成につながっている。
- ・事業実施にあたっては、事業参加に年齢制限を設けず、夜間枠の活用などを行っているが、館によって実施状況に差があることから、一層の世代間交流を促進する観点からも工夫していく必要がある。

（「これまでの再編整備の進め方はどうだったのか」検証結果）

- ・これまでのゆうゆう館の再編整備を進め方について、多くの利用者から、説明が十分で無いことに加え、利用者の意見を聴く取組が不十分であるという意見が多く、計画が決定した段階ではなく、検討の段階や計画の立案の段階から意見を聞いて欲しいという意見が多くあり、進め方に対して課題があった。
- ・施設利用者との間で、利用施設の老朽化や保育園などの併設施設があることに建て替えの課題を示して意見交換を行ったところ、計画が決まっていなかった段階でこのような意見交換ができたことは良かったとの声が多くあったことから、課題を共有する段階から対話を重ねることの重要性を改めて認識した。